令和４年度岩見沢市子ども・子育て会議

えみふる ふぁいるに関する専門部会

日　時　令和５年２月２４日（金）午後６時00分
場　所　であえーる４階　会議室１

１　開　　会
２　議　　事
（１）えみふる ふぁいるの配付状況
（２）令和４年度の取り組み
　①３歳児健診でのアンケート結果
　②支援者向け説明会
　③新たな活用の機会の開拓
（３）今後の取組の方向性
　①保護者の意識を維持するために
　②支援者の活用の意欲の向上のために
３　その他
４　閉　　会

事務局	1 開会(18:00)
事務局	2 議事
A委員	みなさんご協力のほどよろしくお願いします。それでは、さっそくですが、議事に進みます。 (1)えみふるふぁいるの配布状況について、事務局から説明してください。
事務局	えみふるふぁいるの趣旨について、説明させていただきます。 えみふるふぁいるは、子どもが生まれてから高校を卒業するまでの各ライフステージにおいて、成長や健康、発達などを記録することができる成長記録ファイルとなっています。令和元年9月の1歳6か月健診から配布が開始されてから、3年目となります。市内在住の18歳以下の子どもを対象としており、保護者からの求めがあれば子育て総合支援センターや教育支援センター、市役所福祉課、市立病院小児科の窓口でも配布しております。配布後の保管は子ども及び保護者となっています。 ②活用の流れですが、活用の移り変わりを3つのステージに分け、目的やアプローチの方法について示しています。「成長記録を収めるファイル」と

	して、スタートし、子どもの成長が進むにつれ、発達などで心配なつまづきがあった時に、このファイルを持って母子保健や福祉、教育、医療など様々な機関で相談や支援を受けることにより、成長記録ファイルから発達支援ファイルに変化し、その後の支援をスムーズに進めることができたり、ファイルをもとに関係機関が情報を共有し、切れ目のない一貫した支援を提供するなどの効果が期待されます。 えみふるふぁいるの配布状況についてご説明いたします。令和元年度は267 冊、令和 2 年度は 434 冊、令和 3 年度は 549 冊、令和 4 年度は 2 月 20 日時点で 434 冊となっております。 配布状況の詳細は右上の表のとおりとなりますが、1.6 歳児健診については、2 月時点で必要部数が配布されております。 子育て総合支援センターの配布数が減少しているのは、1 歳 6 か月健診でファイルをすでに貰っている子ども達が初回の発達相談にきている場合が多くあったためです。令和元年 9 月に初めてファイルを配布した年代は、令和 7 年度には、小学 1 年生全員がファイルを持っている世代となります。 子育て支援係分については、兄弟分やファイルに再発行の方に配布した数となります。 この表の数字には含まれておりませんが、昨日、ある小学校から 6 年生の特別支援の子どもに、卒業の際に、個別の教育支援計画を綴り、中学生以降にも活用してもらえるようファイルを渡す予定ですという、話しを聞いております。 3 歳児健診での配布は、転入者や再配布、兄弟分などに配布した冊数となります。 ことばの教室については、教室を利用する際に作成する計画書をファイルに綴っているとのことです。 福祉課についても、必要な場合に配布してくださっています。 配布状況については、以上となりますが、配布の主となる 1.6 か月健診以外の機関でも、必要とされる方へのファイルの配布と声掛けのご協力を今後とも宜しくお願い致します。
A 委員	よろしいですか。質問が無ければ、次に議事の（２）令和４年度の取り組み、３点ありますので、順番に進めていきたいと思います。 最初に、①３歳児健診でのアンケート結果について説明お願いします。
事務局	3 歳児健診でのアンケート結果についてです。 令和４年４月～令和５年１月に実施した３歳児健診受診者 324 名を対象に、アンケートを実施しました。グラフには、令和 3 年度と令和 4 年度の結果を比較しております。

	「Q1　えみふるふぁいるを持っていますか」という質問に対し、令和４年度の結果は 64%が「持っている」、28%が「どこにあるかわからない」、7%が「転入者・もらっていない」と回答しました。令和４年度は、令和３年度と比較すると、4%下がっていますが、大きな変化はない状況です。 「Q2　えみふるふぁいるを持っていると回答している人のうち、ふぁいるを利用していますか」という問いに対して、令和４年度は 25%が「利用している」、75%が「まだ利用していない」という結果となりました。　ファイルの利用率はいまだに少ないですが、令和３年度と比較すると、１月末時点で微量ではありますが、8%増加しています。件数についても、1 月末時点で、令和３年度より上回っている状況です。 「Q3（複数回答）ファイルを利用していると回答した人のうち活用方法を教えてください」との質問については、上位のものは、成長の記録→写真や作品の保管→通院歴などの記録→保育園や幼稚園での記録→発達に関する記録となっています。 Q4　自由記述欄についてですが主な内容を抜粋すると、活用している内容については、「発達の相談の時に活用している」「読んだ絵本の記録をしている」「成長、発達に関する書類をひとまとめにできるので、書類をなくさずにすむ」「通院歴について、細かい病気は記載していないが、忘れそうなことを記載している」、「幼稚園の入園前の個人懇談時にファイルを活用した」「保育園の失くしやすい物（電話番号簿等）を綴っている」という意見です。 要望については、「電子化して欲しい」、「母子手帳や保育園の連絡ノートと連携できると使いやすいと思う」という意見でした。 その他については、「他のもので代用している」、「書く時間がなく記入するのが気が重い」、「綴っていくとファイルが重くなる」との意見がありました。 令和３年度との比較として、ファイルを利用している実数はいまだに少ないですが、アンケートや３歳児健診の声掛けの際にファイルを実際に見せてもらうと、利用している方たちの利用方法がより具体的になっているなという印象です。 この後、説明にもありますが、各関係機関への説明会やの子育て総合支援センターでの発達相談での親御さんへの声掛けや、その他機関での配布時の説明等が、影響しているのではないかと考えます。 また、ファイルを活用できていない声として、「記入するのが気が重い」という意見がありましたが、たとえ記入できなかったとしても親御さんが様々な場面で貰った忘れたくない書類を綴るだけでも良いのだということを伝えきれていないことが課題として分かりました。 引き続き、アンケートを実施し、利用者の声を拾いながら、えみふるふぁいるの活用状況について、検討していきます。

A 委員	３歳児健診時に、ふぁいるを持参いただく際に合わせて実施しているアンケート調査の結果について説明がありましたが、委員の皆さま、いかがでしょうか？
A 委員	毎日、活用するものではないですから難しいですね。3 歳児健診までの間に活用できる場面はいつですか。
事務局	幼稚園や保育園です。
A 委員	利用する機会を増やしていかなければならないです。
C 委員	保育園では連絡帳がありますが、ファイルと兼用して使用するのは難しいです。
A 委員	保育園の連絡ノートはどのようなノートですか。
C 委員	小さいサイズのノートです。
A 委員	何冊もありますか。
C 委員	毎年 1 冊です。
事務局	幼稚園、保育園を卒園後に、ファイルに綴ってもらうと良いかもしれません。
A 委員	しかし、ファイルが分厚くなってしまいますから、難しい問題ですね。 その他、ご意見ありませんか。 次に、②支援者向け説明会について説明お願いいたします。
I 助言者	えみふるふぁいるは保護者に持ち続けてもらうことがこれまでも課題になっており、昨年度は、ふぁいるをもつことのインセンティブについて、この専門部会でも話し合われました。その中から、今回、次の 2 つの話題、資料のピンクの枠の中にあることについて、着目してみました。 「ファイルを持って相談機関に行けばその結果が綴られる」こと自体がファイルをもつメリットになること。また、小中高校生になって支援が必要になったとき、過去の成育歴は重要である。保護者も忘れかけていることです。 乳幼児期は、特に、“記録を溜めておく”時期です。保護者から話されることや保護者自身がふぁいるに残した記録、つまり“保護者自身が気になっていること”“記憶に残っていること”はもちろん重要で有用な記録になります。しかし、ときには“保護者は気づいていないけれど、支援者の側から見て発達上気になること”は、後の支援において重要なヒントとなります。 このことから、保護者にふぁいるを持ち続けてもらうためには、保護者の側に“持ち続ける意欲”をもってもらうだけではなく、支援者の側に“「えみふるふぁいる」をたくさん使ってもらうこと”がとても大切であることが改めて認識されました。 資料 A をご覧ください。今のところまだ、支援者、ここでは学校・幼稚園保育園・児童デイサービスなど子どもに関わる様々な機関のことを指しますが、この方たちが積極的に活用してもらうところまでに、「えみふるふぁい

	る」は浸透していません。昨年度に引き続き、今年度も支援者向け説明会をおこないました。資料Aをご覧ください。 小中学校対象の説明会は令和4年6月8日におこないました。「特別支援教育推進委員会」という、市内の小中学校の特別支援コーディネーターが集まる場を借りて実施しています。小中学校対象の回では、「ふぁいるの概要のおさらい」と「就学時健診での導入の構想」を説明しました。 特別支援コーディネーター向けの説明会は、これまでも回数を重ねてきており、比較的「えみふるふぁいる」の理解度は高い集まりです。アンケートの結果から、「えみふるふぁいる」への関心や期待の高さがうかがわれ、「既に活用している」という声も挙がっていました。 令和7年度に小学1年生になる子どもたちが、全員配布になってから初めての世代となりますので、小中学校はその年からが本格始動となる見通しです。 次に、幼稚園対象の説明会です。令和4年7月28日に、幼稚園対象の別の研修会と並行して開催しました。市内全5園から9名の先生方に参加していただきました。内容は、「ふぁいるの概要のおさらい」とオプショナルシート「成長曲線シート」「懇談の記録」の活用の提案を中心としました。幼稚園は、昨年度も「えみふるふぁいる」の説明会を単独でおこなっており、園長先生や副園長先生には既に主旨や内容が伝わっていましたが、今年度は主任の先生や担任の先生など、現場で実際に発達支援に関わる先生にもご参加いただくことができました。こちらからの提案は、身体測定の機会に「成長曲線シート」、個人懇談の時期に「懇談の記録」とそれぞれオプショナルシートを活用していただくことでしたが、園側には「新入園児の発達状況を知りたい」というニーズがあり、その情報源として「えみふるふぁいる」に期待が高いことがわかりました。 3つ目は、保育所対象の説明会の実施です。令和4年10月5日に、幼稚園同様、別の研修会と並行して開催しました。市内16の認可保育所から、15名の先生方にご参加いただきました。先ほどの小中学校や幼稚園は、「えみふるふぁいる」運用開始の頃から、少しずつ内容を充実させながら説明会をおこなってきた積み重ねがありましたが、保育所は、主任保育士など“園内で発達支援の中心となる保育士”が集まる既存の会がそもそもなく、これまで園長など施設管理者向けや、ごく一部の保育士に向けた説明会しかおこなうことができていませんでした。そこで、今回は”園内で発達支援の中心となる保育士“に参加してほしいと呼び掛け、主任保育士を中心に参集しました。内容も、小中学校や幼稚園とは少し内容を変え、「えみふるふぁいる」のそもそもの主旨や、どう活用していきたいのかのビジョンについて丁寧に説明するようにしました。また、幼稚園同様に、具体的な活用場面として、オプショナルシートの活用も呼びかけました。

	保育所は「えみふるふぁいる」について、まだまだこれから知っていただく段階と感じています。ただ、説明会を担当した職員が、後日別の用事である保育園を訪問した際、「主任から聞いて懇談でえみふるふぁいるを使ってみました！保護者との話が深まりました！」と声をかけてくれた保育士がいたそうです。保育所は、多くが交代勤務のため、一斉に「ふぁいる」を浸透させるのがなかなか難しいですが、“現場に”確実に伝わるよう工夫していくことで、地道に浸透させていくことが増えるかもしれません。 最後に、療育機関、児童デイサービス対象の説明会です。つい先週、令和5年2月16日におこなわれた、“岩見沢地区 地域療育 推進協議会　事業所部会”の中で時間をとって開催しました。岩見沢地区の通所支援事業所全21か所から21名の療育者、また、相談支援事業所から2名の相談支援専門員にご参加いただきました。ここでは、「ふぁるの概要のおさらい」のほか、今、子ども発達の領域で共通の課題となっている“連携”において、「えみふるふぁいる」をどのように活用できるのかの説明や、各事業所から保護者へ渡す「個別支援計画書」について「えみふるふぁいるに綴じておいてくださいね」と呼びかけてもらう提案をしました。 この回は、小中学校の特別支援コーディネーター同様、参加者が発達支援を専門とする立場のため、「えみふるふぁいる」のビジョンについては賛同を得やすい場でした。一方で、通所している子どもたちの中で「えみふるふぁいる」を既に持っている絶対数が少ないこともあり、実際の療育場面では、まだまだほぼ活用されていないこともアンケートからわかりました。 ただ、通所支援事業所では、半年に1度必ず保護者に「個別支援計画書」を提供することになっているため、新たに何か用紙を用意してもらう等の必要がなく、ただ渡すときに「えみふるふぁいるに綴じておいてくださいね」と声をかけてほしいのだということを明確にお伝えしました。フロアからは、「これから使ってみよう」という前向きな反応がかえってきていました。 以上、「えみふるふぁいる」に”記録をためておく“ために、市内の子どもに関わる機関に向けて今年度は４回の説明会をおこないました。 機関によって、専門領域も「えみふるふぁいる」の認知度も異なっているため、説明会の内容も対象ごとに変えておこないました。また、“この機関では、こんな風に使えるのではないか”ということをできるだけ具体的にお伝えするよう心がけました。支援者向け説明会は、来年度も引き続きおこない、支援者たちに「えみふるふぁいる」を使うことがあたりまえになるようにはたらきかけたいと考えています。
A委員	1年間で、教育委員会の子育て総合支援センターが、ふぁいるの活用に向けた説明会を進めた経緯についてお話がありました。いまの説明に対して、委員の皆さま、いかがでしょうか？

A 委員	来年度は、何カ所ほど説明会を実施する予定ですか。
事務局	開催回数は未定ですが積極的に実施する予定です。
A 委員	説明会に委員の皆さんに参加してもらい、様子を見てもらうのも良いかもしれないです。
事務局	参考にさせていただきます。
A 委員	説明会は、他にどんな場所で行えますか。
事務局	今後の活用に向けて、学校での開催も増やし、啓発活動を行いたいです。
A 委員	いずれは小学生全員が持参する時代となりますから、そこに向けて取り組んで行けば良いですね。 それでは、次に進みます。 次に、③新たな活用機会の開拓について説明お願いいたします。
I 助言者	資料１に戻りまして、３新たな活用の機会の開拓です。 小学校高学年や中学から特別支援学級に入る子もいる。そういう子は、就学相談の情報も、個別支援計画書もない。保護者も気にしてこなかったので小さい頃の発達の経過がわからない。 「えみふるふぁいる」は１歳６か月健診で配布されますが、なかにはすぐにその有用性に気づかない方もいらっしゃいます。やはり、すべての子どもに配布し、“持ち続けてもらう”ことが必要なのだと改めて認識しています。 現在、1 歳 6 か月健診で配布され、3 歳児健診で持参してもらう以降、「えみふるふぁいるを持ってきてください」と言われる機会はない状態です。これでは、保護者が“持ち続ける”ことが難しいのも無理もありません。やはり、成長の要所要所で「えみふるふぁいるを持ってきてください」と言われる機会、「えみふるふぁいる」の登場機会を増やすことが必要だと考えています。 そこで、今年度は、新たな活用の機会の開拓として、２つの取り組みについて報告いたします。資料Ｂをご覧ください。 １つ目に、幼稚園の新入園児面談での活用です。 岩見沢市内の幼稚園では、毎年 11 月初旬から次年度新入園児の願書受付が開始されます。今年度のこの時期、「幼稚園の面談でえみふるふぁいるがいるんですが、なくしちゃったのでもらえますか？」という保護者からの問い合わせが、今までになく多い感触がありました。今回、2 月に一斉に調査したところ、資料Ｂの 3 園について、次のような取り組みをしていることがわかりました。 A 園は、令和 2 年の 11 月から、新入園児願書受付の面談で「えみふるふぁいるの持参」を呼びかけているとのことです。この園では、新入園児の発達経過について、もっと情報がほしいというかねてからのニーズがありました。A 園の先生が初めて「えみふるふぁいる」の説明会に参加したとき、『1

	歳 6 か月健診の情報が得られる』と聞いて、「これは良い！」と期待が高まったそうです。しかし、開始した初年度は、保護者が 1 歳 6 か月健診の問診票を見せてはくれるものの、「えみふるふぁいる」に綴じられている問診票は、“健診の結果どう評価されたか”は記載されていないため、「えみふるふぁいるでは欲しい情報は得られない」と残念に思っていたようです。ところが、令和 3 年度の説明会で、問診票の中で“どこを見ればいいか”、「保護者が気になっていることを書く欄」と「子育ての協力・相談環境を書く欄」のポイントを絞ってみると良いということを知り、今はとても有効に活用できているとのことでした。 Ｂ園は、令和 3 年の 11 月から、新入園児願書受付の面談で「えみふるふぁいるの持参」を呼びかけ始めました。面談を担当するのは先生が、保護者に「よければ見せてもらっていいですか？」とお声掛けし、見ながら保護者のお話を聞いていくそうです。Ｂ園でも、説明会の情報をもとに、1 歳 6 か月健診、3 歳児健診のそれぞれ、「保護者が気になっていることを書く欄」や「保護者の心理的負担について書く欄」を注意してみるようにしているそうです。また、どちらも、何も手がかりがない状態では聞きづらい内容であるものの、手元にふぁいるがあると「お母さん 1 歳半の頃はこうしたことが心配だったですね？」と話題にしやすいという感想をいただきました。 Ｃ園は、令和 4 年の 11 月から、新入園児願書受付の面談で、持ち物の 1 つとして「えみふるふぁいる」を記載するようにしたそうです。結果、ほとんどの保護者がきちんと持参してくれているとのことでした。Ｃ園では、1 歳 6 か月健診や 3 歳児健診の問診票は参考になることに加えて、子育て総合支援センターがおこなっている“療育支援教室うずら”に通っている子は、その資料が綴じられているため、保護者と「うずらに通っていた経緯」など話し合うことができて、参考になるとのことでした。また、Ｃ園では、年に 2 回の保護者総会という機会をもっているそうで、ここ数年はコロナの影響で開催できていなかったものの、今後再開すれば、保護者総会で「えみふるふぁいる」の活用を促していく予定があるそうです。 以上のように、支援者向け説明会がきっかけとなって、幼稚園の新入園児願書受付で、“全員対象”に「えみふるふぁいる」の持参を呼びかけてもらう機会をつくっていただくことができました。 ２つ目は、資料Ｂの右ページ、「就学時健診での導入」です。 昨年度のこの専門部会で、小学校で毎年おこなう「就学時健診」は、新 1 年生全員が対象であり、導入もできるかもしれないとの声があがりました。 先ほども話題にでたように、全員ファイルを持っている初めての世代は令和７年度の新１年生です。 そこから、逆算すると、もっとも早くて、令和６年度の１０月の就学時健診で持参を呼びかけることができます。その準備として、今年度は、まず「就

	学時健診」の視察をおこないました。 　令和４年 10 月１日、市内の小学校で一斉に就学時健診がおこなわれ、今回の視察は東小学校を対象としました。 　資料Ｂには写真も掲載していますが、親子は入園予定の学校へいくと、まずは受付をし、順不同で、問診票をもって健診項目を回ります。すべての健診項目が終わったら、親子は受付へ戻り、記入済みの問診票を受付けへ提出、問診票は２枚複写になっており、受付は保護者用控えを切り離し保護者へ返すという流れです。これは、今回視察した東小学校だけでなく、どこの学校もおおむね同じ流れでおこなうようです。 　このことから、「えみふるふぁいる」のために新たに様式を追加しなくても、このとき渡される“保護者用控え”を、「えみふるふぁいるに綴じておいてください」と声かけしてはどうかと考えています。参入する余地はありそうなので、令和５年度は、具体的にどうやってお知らせをし、ファイルをもっていない人からの問い合わせにどう対応するか、など検討していけたらと考えています。
A 委員	だだいまの説明に対して、委員の皆さま、いかがでしょうか。 　以前、いじめの調査部会に関わった際に、その自治体では成長ファイルがあって、いじめに関わった子ども達の発達の状況を知ることができ、とても役に立ちました。ファイルを持っていれば、この子どもがどんな機関と関わってきたのか、どんな人と関わって成長してきたのかが分かります。 　皆さん、何かアイディアなどありませんか。
G 助言者	幼稚園の取組の報告を頂きましたが、報告内容はその他の幼稚園に共有されていますか。
事務局	説明会の中で、発言いただいた内容であれば共有できていますが、すべての情報を共有はできていません。今後、情報共有させていただきます。
A 委員	オプショナルシートは、現在どのような種類のものがありますか。
事務局	現在は、成長曲線、相談の記録、心理検査（発達検査）の記録、保育園等で活用してもらう懇談の記録があります。
A 委員	例えば、保育園や幼稚園や小学校など、えみふるふぁいるに綴ってもらうための作品を作成してもらうのはどうでしょうか。
事務局	参考にさせていただきます。
A 委員	表紙がシンプルですので、シールなどを配るというのもあります。
事務局	3 歳児健診の際に、「ふぁいるが可愛くないので使用する気になれない」といった声も多くあります。最初の趣旨としては、ふぁいるを自分なりにアレンジしていただくためにシンプルにしていますが、ふぁいるをアレンジして

	もらうきっかけづくりとして、シールなどを配布することも今後の参考にさせていただきます。
F 助言者	使用できる場面を増やすために、就学前健診にふぁいるを活用するということでしたが、例えば、問診票とは別に保護者に子どもの様子を記入してもらう用紙を追加するのはどうでしょうか。 入学する前に、親の声を聞く機会はあまりありません。一般的に、子どもの引継ぎは、幼稚園、保育園と小学校間で行われることが主だと思います。保護者が感じる不安点や児童の様子を記入できるシートを作成し、事前配布、就学前健診にて提出してもらい、原本は回収、コピーはえみふるふぁいるに綴ります。保護者側には事前に子どもの心配ごとを伝えられる機会となり、学校側には保護者の声を引継ぎ資料として得ることができ、双方にメリットがあるものとなります。保育園や幼稚園側の声と保護者からの声を両方得ることで、実態を把握できるのではないでしょうか。
事務局	事前に作成して、配布するということですか。
F 助言者	就学前健診にて、問診票とは別にシートを作成し、事前に配布できれば良いですね。また、小学校から中学校に進学する際にも、新入生説明会で同じようなシートを作成すれば、えみふるふぁいるが親と学校とのパイプ役になるかもしれません。
事務局	シートを作成する際に、モデルとなるものはありますか。
F 助言者	活用してよいか確認は取れていませんが、特別支援の推進委員会のほうで、作成しているものがあります。
事務局	今回の意見、参考にさせていただきます。
H 助言者	あらかじめ複写式で作成すれば、コピーせずにファイルに綴ることができますね。ファイルに綴ってもらうように声をかけても、無くしてしまう保護者が多いと思います。ファイルを持参してもらい、問診票などのシートを綴って、ファイルを保護者に返すことができれば、確実に資料が綴られます。ファイルを綴って渡すことも検討する必要があるかと思います。
A 委員	紙に記載している内容があったほうが、話すきっかけになります。
事務局	就学前健診は、すべての子ども達が通る道となりますので、すべての子どもの情報を取りこぼさない場面となります。頂いた意見を参考に、シートなど検討していきます。
F 助言者	話しが変わりますが、母子手帳との連携があれば、幼児期からの引き続き

	がスムーズになるかと思います。
A 委員	えみふるふぁいるは、母子手帳の後の記録ができる場所としてもらい、母子手帳の使用後は、ふぁいるに綴ってもらえばよいと思います。
E 助言者	中学校になると、途中から特別支援学級に在籍変更となると、幼少期の記録が全くない場合があります。最近は、幼少期の記録は大切だと言われており、保護者の方に幼少期の話を聞くことが多いです。中学校での活用は、だいぶ後になるなという印象で、見通しはなかなか立ちません。幼少期から小学校までの記録が、えみふるふぁいるに当たり前に綴られていれば、保護者も一から説明せずに済みますし、支援する側としては非常に助かります。 ただ、6 年間分の前期、後期の指導計画と教科ごとの指導計画、さらに支援計画が綴られているとかなりの厚さになり、1 冊のファイルでは難しいと考えます。幼少期の作品なども加わると、かなりの量になると思います。現在は、学校ごとに色々なファイルを使用していますが、いつか同じファイルを使用し、個別の支援計画も徐々に統一されつつありますので、共通のものを使用できる時代が来るのは、楽しみでもあります。
A 委員	2 冊目、3 冊目を貰うこともできますか。
事務局	もちろんです。
A 委員	先んじて、特別支援の子ども達に活用してもらうことも良いかもしれません。
H 助言者	以前は、えみふるふぁいるがどのように活用されていくのかが、不透明でしたが、幼稚園や保育園などの活用例を知ることができました。今後、小学校、中学校での活用の仕方について、議論されていくものと思います。 障がい福祉の立場として、大人になってから、障がい認定の時に、認定機関からいつも求められるものは、通知箋です。しかし、通知箋を持っていない、無くしてしまったという家庭が多くいます。幼い頃に、手帳を取る場合は、記録がたくさんあり、関係者から直接お話を聞くこともできますから、問題はありません。大人になり躓いてしまった時に、幼いころの躓きがあるかもしれません。通知箋には、友達とのコミュニケーションの様子や集団行動の様子が記載されています。20 代、30 代、40 代になってからそういった情報が求められる方は多くいます。特別支援学級にいる子ども達は、何かしら情報がありますが、それ以外の子ども達の情報はとても少ないです。通知箋以外に、健康状況について記載されている「すこやか」は、必ず全員が貰うものですから、えみふるふぁいるに綴られて欲しいという思いがあります。
A 委員	このファイルは皆が持っているという特徴がありますが、そういった部分

	で岩見沢はチャレンジしていますよね。 ほかに無ければ、次に議事の（３）今後の取組の方向性についてです。まず、事務局から説明願います。
事務局	資料２をご覧ください。 ３　今後の方向性について です。２つの区分に分けて、取組について説明します。 １つ目は、「保護者の意識を維持する」ということです。 課題として、ファイルを所持・活用の意識を維持していくことが課題としてあります。 検討のための１つ目の視点として、ふぁいるを持っていることへの意味を伝えるということです。 １歳６か月健診にて、ファイルの説明をし、配布しています。現在のファイルの説明の際には、基本シートの説明を主にしております。記録について、手で記入できればもちろん良いですが、資料１の３歳児健診のアンケート結果からも、「記入することが気が重い」という意見がありました。記入できなくても、親御さんが様々な場面でもらう書類や、忘れたくない書類を綴るだけでも良いのだということを伝えきれていない課題点があります。 成長曲線などのオプショナルシートや、お薬手帳や病院でもらった書類、幼稚園や保育園での年間計画を綴るなど、基本シート以外の幅広い活用の方法を具体的に伝え、重荷に感じることなく、「どんなものでも、忘れたくないものをふぁいるに綴っておくこと」を最初のファイルの配布時に伝えていく必要があります。 ２つ目の検討の視点として、ふぁいるの登場機会を増やすことです。 市主催のイベントにて、オプショナルシートを配布し、ファイルに綴ってもらうよう声掛けをすることです。例として、あそびの広場などで、ファイルに綴ってもらう成長曲線や記念の写真などを配布し、家で綴ってもらうよう声掛けをすることです。 続いて、絵本の読書記録をするなど、楽しく子どもの成長を記入できるオプショナルシートを随時追加していくことです。 現時点で、案として、資料２の左下に掲載しております。こちらは、３歳児健診のアンケートの声を参考にさせていただきました。成長といっても、型にはまった成長の記録だけでなく、楽しい日常の出来事も、成長の記録の一つとして、ファイルに綴ってほしいことを伝え、アンケートで実際に利用している方たちの声を拾いながら、オプショナルシートを随時追加していきます。 最後に、資料１でも説明にありましたが、R6 年度より実施予定の（R7 年度入学児童を対象とした）就学前健診の活用に向けた準備です。実施に向けて、来年度は準備期間として検討してまいります。

	続いて、支援者の活用意欲の向上についてです。
	「支援者の活用意欲の向上」における課題について、資料２に２点記載しています。 １つ目に、「えみふるふぁいる」に綴じる記録は、保護者や、成長した子ども自身が見ることを想定しなければならない問題です。子どもの発達のこと、それはときには“障がい”の可能性など、かなりデリケートな話題を含んできます。支援者たちは、保護者をいたずらに困惑させることのないよう、言動や記録に細心の注意を払っているものです。 たとえば子育て総合支援センターの心理士は、心理検査を受けた親子に対して、オプショナルシート「心理検査（発達検査）や発音の検査の記録」を渡しています。シートには、保護者自身に、心理士が説明した検査の結果を書いてもらいますが、そもそも心理士は保護者に対して「ＩＱいくつですよ」「発達障がいですね」とは言いません。「この子の今抱えている問題は、こういう苦手さからきているのかもしれないですね」や、「こういうことが得意な子なので、こんな風にサポートしてあげるとうまくいきそうですよ」など、保護者の心配事に対して、検査の結果からいえる有効な情報を説明していきます。これは、心理検査から詳細な情報を得たいと思っている別の支援者にとっては、物足りないかもしれません。 ２つ目の課題は、先ほど話題に出たように、「えみふるふぁいる」に綴られる情報を充実させていくには支援者たちの積極的な参与が欠かせないものの、「えみふるふぁいる」から情報を得たいと思っている支援者にとっては、メリットといえるほどの情報は少ないことです。特に幼児期は、“これから記録をためる”時期であるため、「ふぁいる」を見ただけで得られる情報はあまり多くありません。 そこで、「検討の視点」として、２つのビジョンを挙げました。 １つは、「えみふるふぁいるありきの連携ではなく、「えみふるふぁいる」を連携のための一つのツールと位置付けた考え方です。 もう１つは、支援者にとっての“メリット”を推すよりも、“将来のその子の支援において大切な資料になる”ことをもっと訴えていくことです。 資料Ｃをご覧ください。 1 発達支援におけるタテ・ヨコの連携において、「えみふるふぁいる」はどう作用するのか 発達障害者支援法（※平成 16 年制定、17 年施行）が平成 28 年に改正された際、その第 1 条に、「発達障害者の支援においては、切れ目ない支援が特に重要である」という一文が追加されました。 発達障がい、または、その傾向のある子どもたちについて、家庭や幼稚園保育園、学校、その他の福祉サービスなど、関わる機関は、各々に分断された支援をするのではなく、見立てや支援方針を共有し、横の連携もって支援

	する必要があります。そして、乳幼児期から学齢期、成年期…とライフステージが進んでいく中で、支援が分断されてはならず、今度は縦に連携して支援をつないでいくことが大切です。 資料の図は、厚生労働省の「今後の障害児支援の在り方について」の報告書から抜粋したもので、こうした縦と横の連携を表したイメージ図です。 そして、発達障害やその傾向のある子どもたちに限らず、その個性や生き方を理解され、地域の中でつながり見守られていくことは、すべての子どもにとって、大切にすべきことでもあります。 この縦・横の連携において、「えみふるふぁいる」の強みは、“保護者が持ち続ける”という点ではないでしょうか。 先ほど課題にあげたとおり、「ふぁいる」に綴られる情報は、“それだけで必要十分”な情報ではないと思います。ただ、何歳ごろどんな子どもだったのか、いつ、どんな支援者が関わってきたのか、そのヒントが「ふぁいる」に綴られているはずです。ヒントを辿ることで、もっと詳しい情報を得ることができます。 「検討の視点」に挙げた、「えみふるふぁいる」ありきではなく 1 つのツールであるとは、こうした位置づけを意味しています。 資料 C をご覧ください。1 歳 6 か月健診で保護者が初めて「えみふるふぁいる」を受け取ったとき、「ふぁいる」の構成はこのようになっています。先ほどの報告で、新入園児の願書受付面談で活用した幼稚園が、“「えみふるふぁいる」では欲しい情報が得られない”と感じたエピソードに触れていましたが、「えみふるふぁいる」は“すべての子ども”が対象であり、保護者が気軽な気持ちで使えるよう、標準パックは、あくまで保護者の備忘録や思い出の記録が中心になっています。 ただ、その後の成長の中で、個人懇談の記録を綴じたり、心理検査の記録を綴じたり、通知箋や表彰状をポケットに入れたりしていくことで、「ふぁいる」は“その子だけの成長と発達の記録・記憶”となり、少しずつ内容も充実してくるようなつくりになっています。 また、学校現場からの声に記載したとおり、「就学相談や入学後の教育相談で、“えみふるふぁいる”を持参し見せてくれる保護者の方が増えてきた。」「相談歴がわかると話が進めやすく効果を感じている」「学校で作成している“個別の教育支援計画”を一緒に綴じられるところがよい」「通常級のうちは保護者も意識していないため、いざ支援級になってから幼少期の困り感を聞いても思い出せない」「就労の時に良い情報になると思った」など、“えみふるふぁいる”は、後になればなるほど必要になるものだということがわかってきています。 ですから、確かに乳幼児期はまだ“情報を得る”には物足りないかもしれませんが、その子の将来のために、支援者の方々には“記録を溜める”こと

	に取り組んでいただけるよう、今後も支援者向け説明会をおこなっていきたいと考えています。基本的に、教育・福祉に関わる支援者の皆さんは、「この子のために」という想いを原動力に支援している方が多いので、支援者自身のメリットを推すよりも、「その子の今後の支援のためのもの」と訴えていく方が、私たちの想いも伝わるのではないかと考えています。
A 委員	只今の説明を聞き、皆さんからご意見をいただきたいと思います。 協議のポイントは、「普及していくうえで保護者の意識を維持するためには、どうするのか。」「支援者の活用意欲の向上のためには、どうすべきか。」の 2 点についてです。 これまでの説明を聞き、委員の皆さまからご発言いただきたいと思います。
D 委員	まだ、あまりファイルを活用できていませんが、先ほどのお話から通知箋をさっそくファイルに入れようと思います。何を入れれば良いか分からないというのがありました。個人的には、質問があれば記入しやすいと思います。母子手帳には、5 歳頃までは記入する欄がありますが、それ以降は記入する項目が無いので、えみふるふぁいるに記入できる欄があれば良いと思います。
A 委員	「小学校の時にはどんな友達がいたか」や、「好きなものは何だったのか」というような質問ですね。
D 委員	そのような内容であれば、子どもと一緒に記入できると思います。
A 委員	1 年ごとに記入する欄があれば、年に 1 回は記入できます。むしろ枠組みがあれば、書きやすいということですね。 市主催のイベントに参加した場合、どうなりますか。
事務局	イベントに参加した際に、記念のオプショナルシートを渡して、綴ってくださいと声掛けはできるかと思います。
D 委員	先ほど、読書記録シートの案がありました。難しいかと思いますが、借りた本のタイトルを一覧にして頂ければ嬉しいです。よく図書館を利用していますが、自分で記入していくのはなかなか続かないので。
事務局	即答はできませんが、担当の課と相談していきます。
D 委員	図書館にも同じような書類はありますよね。一覧の他に、感想などを記入できる欄があれば、なお良いと思います。
A 委員	星いくつなど塗れる欄があっても良いですね。そういう内容であれば、アプリのほうが便利でしょうか。
D 委員	アプリも以前使用していましたが、続かなかったですね。ですが、図書館は通い続けていますので、そのような一覧のシートを頂ければ嬉しいです。
A 委員	図書館を活用する方も増えるかもしれません。
事務局	ブックスタートをはじめ、図書館でも子どもへの取組を行っていますの

	で、それも踏まえ検討していきます。
A 委員	支援者への説明の報告がありましたが、とても大事ですね。支援者に対して、“こどもの将来に向けて大事な情報になる”という意識を持ってもらうことは、とても大事です。
事務局	地道に伝えていくしかないと思っています。
D 委員	小学生は、どのくらいの人数がファイルを持っていますか。
	1 歳 6 か月健診や 3 歳児健診の兄弟分として渡した方や、発達の相談に来られた方や、学校から求めがあった場合に渡した数になりますので、多くはありません。
D 委員	現在は、ファイルを持っている子は少ないかと思いますが、学級通信に通知箋を入れて下さいという記載があれば良いと思います。通知箋を入れる場所に困っていたので、入れる場所として教えてもらえると無くさないと思います。
事務局	現時点では、小中学校への配布数は少ないですが、令和 7 年度から小学 1 年生全員がファイルを持っている学年になりますから、その段階から呼びかけはできるかと思います。
A 委員	世代ごとにモニターがいれば、ファイルの課題が見えてきますね。
事務局	令和 7 年度の活用に向けて、モニターについても検討していきます。
A 委員	ファイルの開始当初は、全く興味を持ってもらえないのではないかと不安に感じていましたが、少しイメージが見えてきて安心しました。
F 助言者	その他の案として、思春期の時期に子育てについて悩むことが多いと思います。子どもが泣き止まない場合、親としてはとても心配になると思います。現在はネット社会ですから、調べればすぐに出てきますが、子どもの心理状況もファイルに記載されていれば、子育てのヒントとしてファイルを見るきっかけになると思います。子どもの反抗期がきた時や、受験生の心理状況はどのようなものなのか等、子育てのヒントが記載されていれば、ファイルを手元に置いておくかなと思いました。私は、受験生の心理状況を保護者の方に説明する場面がありますが、そのような情報であれば、保護者も見たくなるなと思います。
D 委員	母子手帳であれば、母子手帳を使用する時期の子どもの健康状態や対応の仕方が記載されています。その小学生、中学生バージョンがあれば、とても助かります。
A 委員	先ほど、年代ごとに質問項目を記載するシートがあればという話がありましたが、その横にその時期の子どもの心理状況などが記載されていれば、より活用されると思います。年代ごとの子どもの行動や遊びについて記載されている本が売っていましたが、かなり売れていました。あまり How to として使われると困りますが、年齢ごとのイメージを持てるものとして、そのよ

	うな情報があるのは良いかもしれません。表、裏で作成しても、10ページほどで収まりますね。
D委員	以前、子どもの癇癪で悩んだ時がありましたが、悩んだ時にファイルに相談機関も記載してあればなお良いと思います。
A委員	とても壮大な計画になってきて、ファイルの期待がより高まりますね。
事務局	やはり、オプショナルシートを随時追加していく必要があるかと思います。
E助言者	質問ですが、表紙に記名する場所はあえて作っていないということですか。学校現場に持ってくることになった場合、どこかに記名する場所があると分かりやすいかと思います。
A委員	中に記載する場所はありますが、あくまでもシンプルにして、好きな場所に記載してもらおうという意図かと思います。
E助言者	中学校では、支援計画をお預かりすることがあり、背表紙に名前を付けて金庫に保管していますので、記名してあれば嬉しいです。
事務局	背表紙にあるのが一番良いですか。
E助言者	背表紙が一番、良いと思います。
A委員	他になければ、３　その他に進む前に、本日の議事全体を通して、何かご意見はありませんか。 他になければ、３　その他　に進みたいと思います。 皆さんから、お伝えしたいこと等あれば、ご発言いただきたいと思います。
	3　その他
事務局	閉会19時30分